

|            |                         |
|------------|-------------------------|
| 学校教育目標     | 思いやりの心もち、かしく、たくましい児童の育成 |
| 《本年度の重点目標》 |                         |
| 《重点目標1》    | 確かな学力の向上を図る             |
| 《重点目標2》    | 健やかな体を育む                |
| 《重点目標3》    | 豊かな心を育む                 |

◆記入にあたっての留意事項

- 取組については、各学校の重点目標達成のための方策に応じて設定すること。
- 「取組」「評価項目」「評価項目についての重点的取組」を設定する際には、次の6点をいずれかに必ず位置づけること。
  - ①学力向上に関する取組
  - ②体力向上に関する取組
  - ③心の育ちに関する取組
  - ④いじめ問題解決に関する取組
  - ⑤特別支援教育推進に関する取組
  - ⑥あいさつ日本一に関する取組
- 小・中学校においては、①学力向上に関する取組、②体力向上に関する取組、③心の育ちに関する取組の部分の記述について、スクールプランと整合性を取る。
- 評価の例 A…目標を十分に達成できた B…目標をほぼ達成できた C…あと少しで目標が達成できた D…目標達成までいかなかった

| 取組        | 評価項目  | 評価項目についての重点的取組  | 評価   | ○成果と◆次年度の改善点   |
|-----------|---|---|--|--|
| 学力向上の取組   | 【授業改善】<br>＜児童質問紙(71)＞「算数の勉強が好きだ」について肯定的な回答した児童の割合80%以上。<br>＜児童質問紙(73)算数の授業はよく分かる」と肯定的な回答した児童90%以上。                      | 算数科主題研究を日常の授業改善に直結させる。基礎基本、特に計算力の向上にまずとりかか。一単位時間の中でどのような配分でどのように「教える」「考えさせる」「話し合わせる」「習熟学習をさせる」とよいか全職員で研究授業を通して検討をする。この結果、計算力を身に付けさせることから、児童が「(71)算数の勉強が好き」「(73)算数の授業がよく分かる」という児童を増やしていきたい。            | B  | ○研究授業で確認し続けてきた、「めあて」「個人の課題解決」「集団での解決」「まとめ」「ふりかえり」の算数科授業パターンがどの学級でも定着してきた。新規採用教諭の学級でも算数科が一番安定した授業となっている。特別支援学級をのぞく全ての学級で算数科の研究授業を行った。各学年、基礎基本の力の中でも計算力の向上のために毎時間どのポイントに気を付けるのが確認できた。特に板書、発問の工夫、机間巡視の重要性を確認した。<br>●＜児童質問紙(71)＞「算数の勉強が好きだ」の肯定的な回答は78%、児童質問紙(73)「算数の授業はよく分かる」は86%。楽しくわかる算数になるようより工夫をしたい。   |
|           | 【補充学習】<br>＜児童質問紙(33)＞「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれますか」について、肯定的な回答をした児童の割合90%以上。                        | 毎週2回の補充学習の時間を新たに設定する。国語と算数を実施する。放課後に15分程度の時間を確保する。学習課題は「北九州市学力定着サポートシステム」活用する。サポートシステムの学力調査分析サポート機能を利用する。本年度より開始する「北九州市ひまわり学習塾」の講師とも連携して児童一人一人の苦手克服を図る。「北九州市ひまわり学習塾」の実施時間には場合によって担任が不参加児童に対して補充学習を行う。 | B  | ○9月第1週より補充学習をスタートできた。補充タイムは教師および児童に定着してきている。「ひまわり学習塾」についても同様である。指導講師より学習に取り組む姿勢が良いと高評価をいただいている。<br>○「ひまわり学習塾」に目的意識を持って参加している児童の中に年間の課題を2学期で終了する者も出た。応用力を高めるワークにすでに取り組んでいる児童もいた。<br>○質問紙33「先生は、授業やテストで間違えたところについて分かるまで教えてくれますか」に対して児童の肯定的な回答は91.7%<br>●補充タイムで取り組んでいる「北九州市学力定着サポートシステム」はシステムの稼働が遅かったため診断などでは有効な活用ができていない。次年度は一学期から有効な活用をしていきたい。<br>●「ひまわり学習塾」は継続実施が決定した。子どもたちへの励ましを通して学習意欲を高め続けたい。 |
|           | 【家庭学習】<br>＜児童質問紙(14)＞「学校の授業時間以外に1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」について、「1時間以上している」と回答した児童の割合 50%以上                                  | 学校の一日の校時を見直し、下校時間を早める取組をする。早く下校する日をつくり、家庭での学習時間を保障することで学習時間を増やしたい。  | C  | ○上級生で家庭学習を毎日することが定着してきている児童が増えてきている。時間割の変更を実施して約半年以上がすぎ、児童・教師ともリズムに慣れてきたように感じる。<br>●「家でする勉強の時間」が1時間以上が26%、30分～1時間が46%となっている。まだまだ家庭学習時間は多くない。保護者への啓発をし、家庭との連携を高めたい。   |
| 体力向上の取組   | 【授業改善】<br>「体育の授業は楽しいですか」について、肯定的な回答をした割合90%以上   | 学習に対するめあてを持たせる。達成感を持たせる場面を増やす。授業で友だちと協力する場面や競争する場面など単元によって様々な取り組み。鉄棒カード、マラソカードなど学習カードを作成し、有効活用する。   | B  | ○「体育の授業が楽しい」児童は92%。目標を上回った。体育科での授業のめあてを示し、個人のめあてを持たせる授業が日々行われている。各学年に応じた「鉄棒」カードなどが作成され有効に活用できていた。休み時間にも鉄棒の練習に励む児童の姿が学年を問わず見られた。<br>●職員アンケートで「体育授業の工夫・改善に努め、児童の体力・運動能力の向上を図っている」の結果は4点満点中2.9だった。さらに高めたい。  |
|           | 【体力テスト】<br>体力テストの数値をあげる   | 児童に具体的な目標数値を設定させ、達成を具体的にわかるようにする。校内に児童名と記録を示したランキング表を掲示し、目標となる数字を持たせ、競争心を持たせる。このようにして児童に体力テストに対するチャレンジ意欲を持たせる。  | B  | ○5年生の女子のスポーツテストの数値は市内でも16番目と言う高い結果が出た。5年生の男子を除いて、その他の学年も概ね好結果出ている。小中連携講師が、小学校児童の各学年の実態を理解してきている。学年に応じた準備体操や指導を行っていたことや 本年度の結果をランキング表にまとめ校内に掲示した。新体力テストの結果について意識を強く持つ児童が増やしたことが成果があった。<br>●投げる能力については変わらず低く、本校の課題となっている。  |
| 心の育ちの取組   | 【授業改善】<br>＜児童質問紙(43)＞「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」について、肯定的な回答をした児童の割合 90%以上   | 特別活動などで異年齢での掃除、集会、遊びなどを積極的に実施する。上級生は人に役に立ったという喜びを体感させていきたい。下級生は今度は私がという気持ちを持たせる。「総合的な学習の時間」で4年生は障害者福祉の学習を、5年生は老人ホームとの交流を伝統的に行っている。継続実施する。   | A  | ○＜児童質問紙(43)＞「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」について、肯定的な回答をした児童の割合は95.8%いる。目標の数値を超えた。具体的な取組として1年生と保育所園児、5年生と中学生、5年生と老人ホームとの交流が計画通り進められた。特に中学校との交流では、八幡西区中学校「総合的な学習の時間全員研修会」の授業に参加することになった。1年生は生活科の学習「おもちゃランド」で相手意識を持つ活動ができた。保育園へも出かけ、園児の発表を聞かせていただいた。異年齢の方々との交流は児童にとって貴重な体験となった。心のもった取組になった。<br>●本年度の取組では5年生が他者へ関わることが多かった。老人ホームとの交流は4年生が行うなどして分担をする必要がある。   |
|           | ＜児童質問紙(32)＞「先生は、あなたのよいところを認めてくれると思う」について肯定的な回答をした児童の割合80%以上<br>＜児童質問紙(6)＞「自分には、よいところがあると思いますか」について、肯定的な回答をした児童の割合 85%以上 | 「ほめて育てる八児小」を職員全体の合言葉にして日々の教育活動で浸透させていく。管理職の学校巡視などで児童をほめている場面を見つけ、積極的に職員にその価値を共有していきたい。また、学級会や帰りの会などで友だちのよいところ見つけを行い、互いに認め合い、褒め合う場面を増やす。   | C  | ○＜児童質問紙(32)＞「先生は、あなたのよいところを認めてくれると思う」について肯定的な回答をした児童の割合は66.7%、＜児童質問紙(6)＞「自分には、よいところがあると思いますか」について、肯定的な回答をした児童の割合は87.5%だった。ほめる意識を持ち、実行することを常々職員と子どもも行っている。日常の学校生活、学校行事などあらゆる場面で教師が児童をほめていることが増えている。学習発表会などで地域の来賓からいただいたおほめの言葉を担任を通して児童に返す場面が増えた。<br>●児童に自らの行動の良さや成長を自覚させ「自分にはよいところがある」という自己肯定感をさらにあらゆる場面で増やしたい。   |
|           | いじめのない学校づくりをする  | 毎月1回心のアンケートを行い、児童の悩みを把握する。ケースによって担任が児童と話し合ったり、管理職や生徒指導主任も関わったりして解決していく。   | B  | ○以前より行っている取組なので定着している。児童の悩みが小さなうちに解決をしていくことができていく。有効な取組となっている。<br>●取組が形骸化しないように気を付け継続していきたい。   |
| あいさつを励行する | 児童会によるあいさつ運動を実施する。  | C   | ○いじめ防止の中学校校区の話し合いをうけて、中学校との合同によるあいさつ運動が10月より始まった。毎月10日、20日は小中学生が合同でお互いの正門前に立ってあいさつ運動をした。<br>●次年度も無理なく継続していきたい。 |  |
| 特別支援教育の充  | 児童一人一人のニーズに応える特別支援教育を推進する   | 特別支援教育についてまず職員が理解を深めるための研修をする。特別支援学級の手法を全学級で取り入れるようにする。   | B  | ○本校には情緒の特別支援学級が2学級(在籍14名)、知的の特別支援学級が1学級(在籍6名)がある。日常的に交流があり、ほぼすべての学級と支援学級児童が係わりがある。4月の学校教育計画の話し合いでは時間を取り、資料をもとに交流の仕方や児童理解の研修の場としている。また、特別支援学級で行っている教育的な手立て、例えば一日の予定を視覚的に提示するなど普通学級でも生かすようにしている。<br>●普通学級の児童や保護者が特別支援学級児童を予断や偏見なく普通に接していけるよう啓発に努めたい。   |